

# 第12回国土管理専門委員会の主な御意見

---

平成31年4月23日

## 第12回国土管理専門委員会での委員等からの主な御意見

### 議事(2)ケーススタディーの実施報告について

NO.	要旨
1	(林准教授) 今回のワークショップは、段階的に話が進められてよかった。希望にも光を当て悲観的な方向にならないように留意したのがよかった。今後の課題として、 <b>個人で守るか、共同体で守るかの交通整理がうまくできるようなしなかけが必要</b> 。ワークショップを行う際に、 <b>will・want・can・shouldを意識して議論することも重要</b> 。最終回では、若い方が参加して活発な雰囲気になった。 <b>若い住民や近くの市街地に出ていかれた方も巻き込んだ上で建設的な議論ができれば良い</b> と思う。
2	(新井氏) <b>地域に住んでいる人たちの考え方が大体分かったということが一番の収穫</b> 。地域に住んでいる人たちの考え方について、相違もあったが、同じようなところを守りたいと思っていることが分かった。今後、何を守って何を捨てるかを決めるのが一番大変だが、そこまで持ち込みたい。
3	(瀬田委員) 旧中条村伊折地区を対象とした背景として、一定の条件を満たし、協力してもらえる地域を選んだのだと思う。得られた知見について、 <b>ほかの地域へ展開していくことが重要</b> 。
4	(林准教授) 外部不経済について、現地と学者の感覚はかなり食い違っているため、言葉の整理が必要。学者が考える外部不経済は、治水、水資源や生物多様性の話が主となる。住民の方からそういった項目はリストアップされない。 <b>地域で議論されるのは、光がささずに凍ってしまうことや、使いたいと思ったときに使えないことによる心理的ダメージが外部不経済として大きい。ただしこれらを外部不経済と表現するのが正しいかは議論が必要</b> 。
5	(中村委員) 地域住民の感覚と学者が考える外部不経済については、少し整理した方がよい。 <b>住民側が気づかずに外部不経済を放置した場合の問題もインクルードしないといけない</b> 。一方で、 <b>住民の切実な願いも大事な意味を持つ</b> と思うので、 <b>そこも取り込んで整理していくことが必要</b> 。
6	(新井氏) <b>所有者の意向が第一という感覚は、住宅に関する感覚</b> だと思う。家を売ったり買ったりすることについては他人が文句は言えないよという発想が強い。また、 <b>農地に関しては、ご自由にどうぞという感覚</b> 。森林にはあまり期待はしていない。
7	(土屋委員) <b>共同体としてすべきということと、現実に個別のところではできるということは違う</b> 。実際できるかもしれないが、やらないという場合もある。こういうことの折り合いをどうやってつけていくかが重要。
8	(一ノ瀬委員) 他の地域でもワークショップをする場合、 <b>運営側の人数はどれくらい必要なのか、また適当な期間と頻度についても分かるようにすべき</b> 。

## 第12回国土管理専門委員会での委員等からの主な御意見

### 議事(2)ケーススタディーの実施報告について

NO.	要旨
9	(中条支所久保田係長)林先生の話をおきくだけでも、考えるきっかけになる。今後、旧中条村伊折地区だけじゃなくて11行政区で考えるきっかけが持てれば良いと思う。 <u>市役所の職員は異動があつて変わるため、住民自治協議会で指導できるひとが育ってくれば良いなという思いである。</u>
10	(広田委員)土地利用構想については、もう2回くらいで一区切りつけてよいと思う。住民が課題の共有ができれば、それだけでも大きな成果。 <u>主体の問題は避けて通れないので、次の段階で議論をしていくべき。</u> 適当な主体がないケースも多いが旧中条村については協議会がしっかりされているとのことなので、実行も担えるのかもしれない。
11	(新井氏)旧中条村伊折地区は昔の小学校区の半分程度。 <u>また江戸時代の村の単位であり、ちょうどよい単位だった</u> と思っている。 <u>自治会もそれで動いており、一体感のある単位だ</u> と思う。
12	(中出委員長)検討を行う地域の単位として、 <u>大字単位でいいところと、すごく小さなところじゃないと無理なところと、色々あるのだろう。</u>
13	(山野目委員)バッドシナリオは、土地利用の構想について保守的なことを考えた仮説であり、別にバッドではない気がする。 <u>比較したのは素晴らしい作業だ</u> と思った。

## 第12回国土管理専門委員会での委員等からの主な御意見

議事(3)2019年とりまとめ(原案)について

NO.	要旨
1	<p>(瀬田委員)資料3-1のp3に、<b>土地の現状と課題についてまとめられているが、少し詳しく書くべき</b>。土地がバラバラに悪くなっていき、相続の状況も土地によって異なる状況だということを混ぜると、国の報告書からも、地域に考えてもらわないといけないということが伝わると思う。</p> <p><b>広域的視点については、実態把握の必要性を強調すべき</b>。管理構想や計画をつくるにしても、どの地域をより強くサポートするか決めるにしても必要となる。</p> <p><b>市町村と都道府県と国の役割をもっと書き分けるべき</b>。役割はそれぞれ違うと思うのだが。</p>
2	<p>(大原委員)ワークショップで、住民の方の思考プロセスの一端に触れた点が興味深い。プロセスをより分析すると、住民が管理したい土地の条件が分かってくるのではないかと感じる。外部不経済の評価手法が課題と書かれているが、手法よりもメカニズムの解明が不十分だと感じる。<b>メカニズムレベルでの把握とか、色々なものがある中で住民が総合的な判断に至るまでの思考プロセスをもう少し把握する必要がある</b>。</p>
3	<p>(山野目委員)利用という言葉は、現状を描く描写として使われることもある。利用していないことも利用だという人もいて、論理的に利用されていない土地はないという考え方もある。</p> <p><b>管理構想を国土利用計画に位置づけることについて、賛成する</b>。各地域で作られていく管理構想が、国の施策として熟度が高まったときには、国土利用計画とつなげるべきだという目標を捨ててはならない。<b>今後、土地を手放したいという希望をどれくらい受け入れるか決めていくとき、管理構想は重要であり、制度的な性格をもっていなければいけない</b>。</p>
4	<p>(広田委員)<b>外部不経済について、委員会全体として、過大評価しすぎている印象</b>。過疎化が言われてもう60年経ち、放棄されている場所はたくさんあるが、全体としては特に困っていない現実をもう少し真摯に受け止めるべき。</p> <p><b>外部不経済の指標等が示されているが、ここに力を注ぐことは、意味がない</b>。今ある社会インフラであるトンネル等の維持管理すら難しいのに、管理放棄されたことに対して対応するほど余裕があるのか。地域の人が認識しないような外部不経済を過大視する必要はないのではないかと。</p>
5	<p>(中村委員)住民と研究者には確かに齟齬がある。人工林を途中でやめてしまう場合は土壌浸食が起こるというデータが示されている。<b>定量化は確かに難しいが、研究者が好ましくないとしている状態は、回避した方がよいと考える</b>。一方、現地視察で田んぼが森に返っていった土地は、問題はなさそうだと感じた。<b>人工林をより自然林にする技術があるならば、それはひとつの対策かもしれない</b>。</p>

## 第12回国土管理専門委員会での委員等からの主な御意見

議事(3)2019年とりまとめ(原案)について

NO.	要旨
6	<p>(一ノ瀬委員)以前から0か1という議論に問題を感じていた。<u>外部不経済があるかないかではなく、土地が持っている価値をいかすとか、損ねないことが大事。</u>利用と管理がかなり別々なものに見える。<u>「利用・管理」でよいのではないか。管理がマネジメントなら、管理の中に利用が入っているのが本来の形。</u><u>国・都道府県・市町村の役割について、もう少し書き分けるべき。</u>まず、都道府県で、利用・管理構想をつくらないといけないのだと思う。<u>市町村が全部やるのは人員的にも予算的にも、難しい。</u></p>
7	<p>(土屋委員)<u>外部不経済については、時間軸・空間軸で考えるかがものすごく重要。また、地域を超えた単位で評価することも大事。</u>本来の土地の価値をひとまず評価することのほうが、外部不経済よりもよいのではと思う。広域での評価について、現行の法制度でやるのはもう無理ではないか。ヨーロッパのように、ある程度土地利用について総合的に権限を持つような制度や主体が必要。<u>モニタリングについて書き込むべき。</u>計画だけでなく、順応的管理をしていく必要がある。</p>